

韓国宗族マウルにおける水利慣行 —忠南唐津郡一宗族マウルの事例—

早稲田大学 林在圭

本報告は、韓国宗族マウルの水利協同組織を取り上げ、親族組織としての門中と村との関係について報告する。宗族マウルにおける村落社会の構造は、土地（地縁）を媒介として規定される社会関係と、門中（血縁）を媒介として規定される社会関係とが拮抗しており、宗族マウルの基礎構造はこの二つの社会関係に基づいていると考えられる。

宗族マウルにおける社会関係が具体的かつ顕著に現れる場面は、共同作業・共同利用慣行においてである。そこで、調査対象地である韓国忠清南道唐津郡の宜寧南氏宗族マウル・桃李里における「上桃水利契」という水利共同組織を取り上げる。

韓国において農業用水を確保するための灌漑には、主として「堰堤」・「ボ」・「貯水池」の3つの形態がみらる。また、その管理・運営の主体からすれば、「土地改良組合」の主体と、農民主体とがある。後者は前者に比べ歴史的に古く、農民の自発的な水利共同組織をもっており、これを一般的に「スリガー」（水利契）と呼ぶ。

「上桃水利契」は桃李里の農民たちが、自ら溜池を築造し、その貯水池の水を共同利用・管理するために組織した水利共同組織であり、1930年代後半に日本から導入された水利組合による水利共同利用の方式が、その後の政府の「灌漑改善事業」（1958）にも触発され、1958年に結成される。上桃水利契は、灌漑形態のうち「貯水池」のタイプに属するものであり、管理・運営の主体からすれば、農民主体の自発的な水利共同組織である。上桃水利契は1950年代末から40年間あまり当地域の水田耕作における農業用水の共同利用・管理を担ってきた。しかし、1980年代に大々的に行われた忠清道一帯の干拓事業（「大湖防潮堤事業」）により、上桃貯水池の存在意義は喪失し、1997年に解体してしまう。

水利共同組織を通して見る限り、村における共同性が希薄であることが顕著な特質であるといえる。伝統的に共同利用組織をつくるというよりは、個人個人が個別に問題を解決することが共同性よりも優先されてきた。すなわち、水利共同組織は戦後日本人による水利組合の導入に影響され、戦後韓国伝来の平等的運営システムである「契」と融合し、水利契として組織されたとはいえ、用水確保の際ににおけるブガンや灌井による対処法はまさにこうした共同性の希薄さの象徴といえる。

一方、門中の原理である「長幼の序」は水利契運営における温情的処理策は公平の原理を制約・制限する一方で、成員間のわだかまりを温存し、かつ増幅させる。それゆえに、上桃水利契に象徴されるように、村における共同性は外部条件さえ整えば容易に解体してしまうこととなる。したがって、当事例にみられるように村における共同性あるいは領域統括は日本と対比した場合に、とくに弱いものになっていると言わざるを得ない。